

サイコパシー特性と多次元的共感性

大庭 丈幸⁽¹⁾ (oba.takeyuki@e.mbox.nagoya-u.ac.jp)

西松 能子⁽²⁾・大平 英樹⁽¹⁾

〔⁽¹⁾ 名古屋大学・⁽²⁾ 立正大学〕

Psychopathic trait and multidimensional empathy

Takeyuki Oba⁽¹⁾, Yoshiko Nishimatsu⁽²⁾, Hideki Ohira⁽¹⁾

⁽¹⁾ Graduate School of Environmental studies, Nagoya University, Japan

⁽²⁾ Faculty of psychology, Rissho University, Japan

Abstract

One of the features in psychopathy is a deficit of empathy. Without empathy, psychopathy can not inhibit to harm others. However, previous studies revealed that offenders had more empathic traits than non-offenders. Empathy is defined as multidimensional components (e.g.; cognitive empathy and emotional empathy), but not as a unitary. Generally, psychopathy is consisted of two sub-components: Primary Psychopathy (PP; features of callousness and lack of empathy) and Secondary Psychopathy (SP; features of impulsiveness and uncontrollability to own behaviours). Here, we hypothesized that psychopaths, particularly who are dominant in PP, have less empathic traits both in cognitive and emotional domains, on the other hand, SP is more linked with emotional empathic trait, but less linked with cognitive one. Furthermore, we investigated not only to relate psychopathic traits and multidimensional empathy, but also to validate a Japanese version of the Primary and Secondary Psychopathy Scales (PSPS), using both Machiavellianism (MACH) scale and Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ). Results indicated that correlations between PP and MACH and between PP and BAQ subscales of physical aggression and verbal aggression were higher than correlations between SP and MACH and BAQ, while correlations between SP and BAQ subscales of anger and hostility were higher than correlations between PP and the BAQ subscales. About empathy, consistent with our hypothesis, PP was linked with less empathy both in cognitive and emotional domains, whereas SP was linked with more emotional empathy, but was linked with less cognitive empathy. This reveals that PSPS dissociated PP and SP well. Although there remain some problems, PSPS is a useful scale for measurement of psychopathic traits.

Key words

psychopathy, empathy, machiavellianism, impulsivity, validity

1. 問題

サイコパスとは冷淡、良心の呵責の欠如、無責任、衝動性、表面的な魅力などを特徴とするパーソナリティ障害であり (Cleckley, 1976)、このような特徴をサイコパシーと呼ぶ。サイコパシーを診断する方法には、半構造化面接の Psychopathy Checklist-Revised (PCL-R; Hare, 1991) が代表的であり、多くの研究で用いられている。PCL-R は2つの因子構造によって構成されており、第1因子は冷淡、利己的などの情動的側面の障害であり、第2因子は衝動性や社会的逸脱などの行動的側面の障害である (Hare, 1991; Harpur, Hakstian & Hare, 1988)。このような2因子構造を唱えたのは Karpman (1941) が最初であるとされる。Karpman は、サイコパシーが一次性的サイコパシー (Primary Psychopathy: 以下、PP) と二次性的サイコパシー (Secondary Psychopathy: 以下、SP) に分けられると提唱した。PP は PCL-R における第1因子に相当するような情動的障害を表し、SP は行動的障害を表し、PCL-R における第2因子に相当する。このような2因子構造を基に、Levenson,

Kiehl & Fitzpatrick (1995) は一般人を対象としてサイコパシー特性を測定できる尺度である Primary and Secondary Psychopathy Scale (PSPS) を作成した。PSPS は杉浦・佐藤 (2005) によって日本語訳され、大隅・金山・杉浦・大平 (2007) によって追試が行われ、構成概念妥当性と信頼性が検討されている。しかし大隅ら (2007) が行った研究からは、PSPS 自体の問題点が明らかにされており、PSPS の妥当性をさらに検討する必要があると考えられる。また日本語版 PSPS について、類似の概念との関連を調べた基準関連妥当性については検討が行われていない。

サイコパスと類似する概念のひとつに、アメリカ精神医学会が定義する精神疾患の分類と診断の手引きである DSM-IV (the Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorder 4th edition) の診断名の一つである反社会性パーソナリティ障害 (antisocial personality disorder: 以下、ASPD) が挙げられる (American Psychiatric Association, 1994)。しかし、ASPD が衝動性や攻撃性などの行動的側面の障害を強調しているのに対し、サイコパスは冷淡や感情の希薄さなどの情動的側面の障害を強調している点が異なる (Blair, 2006)。実際、犯罪者を対象とした場合に 50～80% が ASPD の診断基準に当てはまるとされる

が、サイコパスの診断基準に当てはまる人は15～25%に過ぎないという報告がある(Hart & Hare, 1996)。さらに、サイコパシーの2因子構造からの検討では、行動面の障害であるSPはASPDと強い相関が見出されているが、情動的側面の障害であるPPとはSPほどの相関は示されなかった(Hart & Hare, 1989)。このように攻撃行動や衝動性との関連はPPよりもSPの方に顕著である。

また、サイコパシーの利己的、冷淡などの特徴と類似するパーソナリティ特性としてマキャベリアニズムが挙げられる(Christie & Geis, 1970)。マキャベリアニズムとは、イタリアの思想家であるMachiavelliが著した「君主論」に書かれているような、他人を信用することなく、自己の利益のみを追求する態度のことである。先行研究では、マキャベリアニズムはPPおよびSPとの間に有意な相関がみられ、特に冷淡や利己性を特徴とするPPと高い相関が示されている(McHoskey, Worzel & Szyarto, 1998)。よって本研究では、類似概念との相関を調べることで、日本語版PSPSの基準関連妥当性の検討を目的の一つとする。

ところで、サイコパシーの特徴の一つに共感性に乏しいという点が挙げられている(Hare, 1991)。サイコパスは共感する能力が低いため、他者を利用する、あるいは迷惑をかけても平気であるとされている。サイコパスの共感能力を検討した研究からは、特に他者の苦痛に対して、自律神経系反応が弱いことが報告されている(Blair, Jones, Clark & Smith, 1997)。Blair (1995; 2006)は、他者の苦痛を見ることによって攻撃行動の抑制が促進されるというViolence Inhibition Mechanism (VIM) モデルを提唱しており、サイコパシーはこのVIMに障害があるのではないかと提唱している。

犯罪心理学でも犯罪と共感性の関連について研究されている。そのなかで、出口・大川(2004)は犯罪者や非行少年は共感能力が高いというデータを示し、この現象をエンパシク・クライムと呼び、概念化した。しかし、共感性は一次元的な概念ではなく、多次元的な視点でとらえるべきであるという主張があり(Davis, 1994)、このような提唱をもとに多次元共感性を測定する尺度が作成されている(桜井, 1988; 登張, 2003; 鈴木・木野, 2008)。実際、多次元共感性を調査した研究によると、反社会的な人たちは他者の立場に立って考える認知的な共感能力は低いながらも相手の気持ちを代替的に感じる情動的な共感性には差がみられなかったことが報告されている(淵上, 2008; 岡本・河野, 2010)。淵上(2008)や岡本・河野(2010)の調査で使用された情動的共感性を測定する下位尺度は個人的苦痛と呼ばれるもので、これは他者の苦痛や不安に対して不快感や苦痛を経験する傾向のことを表している(Davis, 1994)。鈴木・木野(2008)では個人的苦痛に相当する自己指向的反応と攻撃性質問紙の間に正の相関を見出しており、個人的苦痛が攻撃行動と関連する可能性を示している。このことは上述のBlair(1995; 2006)によるVIMモデルと矛盾するようであるが、個人的苦痛のみでは単に不快感を生じさせるのみであり、他者の立場になって考える認知的な共感性が攻撃行動の

抑制に関連することは十分に考えられる。

このことをサイコパシーの2因子モデルに当てはめて考えてみると、PPは情動の障害を強調しているため、PP傾向の低い人よりもPP傾向の高い人は認知的、情動的共感性がともに低いのではないかと考えられる。つまり、共感性が低いため他者に迷惑をかけても平気であるという、従来の説明が当てはまると推測される。一方、SPについては行動の障害を強調している。上述のようにSPはASPDと強い関連を持っているため(Hart & Hare, 1989)、犯罪者を対象とした場合、よりSP傾向の高い個人が調査の対象になったのではないかと考えられる。そのため、出口・大川(2004)の結果を考慮すると、SPにおいては共感性がSP傾向の低い個人よりも高い可能性が考えられる。このことを認知的な共感性と情動的な共感性に区別すると、特にSP傾向の高い人において情動的共感性である個人的苦痛得点が高く、認知的な共感性が低いのではないかと考えられる。そこで本研究のもう一つの目的として、PPとSPの多次元共感性の違いがみられるかどうかを検討する。

本研究の目的をまとめると、日本語版PSPSの基準関連妥当性およびPP、SPにおける多次元共感性の違いがみられるかどうかを検討することである。具体的にはPPと関連すると考えられるマキャベリアニズム尺度と、SPと関連すると考えられる攻撃性質問紙によって妥当性を、多次元共感性尺度を用いてPP、SPの共感性の違いを検討する。仮説としてはPPとマキャベリアニズム尺度の間にはSPよりも高い相関が得られ、SPと攻撃性質問紙の間にはPPよりも高い相関が得られると予測した。また共感性について、PPは認知的、情動的共感性の低下が予測され、SPは情動的共感性が高く、認知的な共感性が低下していると予測された。

2. 方法

2.1 調査対象者・手続き

都内の私立大学生を対象とした。心理学部の学生が履修する講義の時間内に質問紙を配布し、回答を求めた。プライバシーの保護についてはフェイスシートに記載するとともに口頭でも伝え、回答は強制ではなく、無記入での提出も認めた。大学生227名(男性70名、女性155名、不明2名、平均年齢20.38 ± 4.862歳)の有効回答を分析対象とした。

2.2 使用尺度

質問紙はPSPS、マキャベリアニズム尺度、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)、多次元共感性尺度によって構成された。

2.2.1 PSPS

非臨床群を対象としてサイコパシー特性を測定する自己記入式の尺度。Levensonら(1995)によって作成され、杉浦と佐藤(2005)が日本語訳をした。下位尺度としてPP16項目とSP10項目、全26項目によって構成されてい

る。「非常にあてはまらない」、「ややあてはまらない」、「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。

2.2.2 マキャベリアニズム尺度

Christie & Geis (1970) が作成した、目的のために手段を選ばない、他者を操作的に扱うなどのマキャベリアニズム傾向を測定する尺度。尺度項目は齊藤 (1983) から引用した。全部で20項目あり、「全く思わない」、「あまり思わない」、「どちらでもない」、「少しそう思う」「非常に強く思う」までの5件法で回答を求めた。

2.2.3 Buss-Perry 攻撃性質問紙

攻撃性を、短気、敵意、身体的攻撃、言語的攻撃の4つの下位尺度から測定できる尺度。Buss & Perry (1992) の攻撃性質問紙を安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井 (1999) が日本語訳し作成された。全24項目について「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「どちらともいえない」、「やや当てはまる」、「非常によく当てはまる」の5件法で回答を求めた。

2.2.4 多次元的共感性尺度

登張 (2003) が従来の共感性尺度を総合的に検討し作成した、共感性を複数の側面から測定する尺度である。下位尺度として「共感的関心」、「個人的苦痛」、「ファンタジー」、「気持ちの想像」があり、共感の情動的、認知的要素を測定するのに適している。

澁上 (2008) の調査において多次元共感測定尺度 (桜井, 1988) を因子分析した際、「個人的苦痛」、「空想」、「視点取得」の3因子を見出ししており、それぞれ「個人的苦痛」は「個人的苦痛」、「空想」は「ファンタジー」、「視点取得」は「気持ちの想像」に対応すると考えられる。また岡本と河野 (2010) は、情動的共感性と認知的共感性の違いを明確にする目的で、多次元共感測定尺度の下位尺度のうち「共感的配慮」と「空想」を除外している。そのため、本調査では回答者の負担を軽減するとともに、より明確な違いをみるため、共感の情動的要素を表す「個人的苦痛」6項目と共感の認知的要素を表す「気持ちの想像」5項目を使用した。全11項目について「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「どちらともいえない」、「やや当てはまる」、「非常に当てはまる」の5件法で回答を求めた。

3. 結果

3.1 質問紙

PSPS の26項目の内、3項目 (項目5, 8, 21) においてフロア効果 (平均-1SD, < 1.0) が認められたため、これらを除外し、PSPS の残りの23項目に対して主因子法による探索的因子分析をおこなった。因子数は原尺度の2因子を仮定し、主因子法・Promax 回転による因子分析をおこなった。十分な因子負荷量 (.30 以下) を示さなかった2項目を除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析をおこない、最終的に2因子解が得られた。Table

1 に Promax 回転によるパターン行列を示す。各項目内容から、第1因子はPP、第2因子はSPであると解釈された。項目26について、原尺度ではSP項目であるが、大隅ら (2007) の結果と同様にPPに含まれた。

次に因子分析から得られたPSPSの各因子とマキャベリアニズム尺度およびBAQとの相関係数をもとめた (Table 2)。PPはすべての尺度項目と有意な相関が示されており、SPは言語的攻撃以外の項目について有意な相関がみられた。PPはマキャベリアニズム得点との間にSPよりも高い相関が得られたが (PP; $r = .64$, SP; $r = .29$)、身体的攻撃得点および言語的攻撃得点についてもSPよりも相関が高かった (PP; 身体的攻撃: $r = .53$, 言語的攻撃: $r = .28$, SP; 身体的攻撃: $r = .31$, 言語的攻撃: $r = .02$)。一方、短気得点および敵意得点はSPの方がPPよりも相関が高かった (SP; 短気: $r = .43$, 敵意: $r = .42$, PP; 短期: $r = .24$, 敵意: $r = .29$)。

実際に相関係数間に差があるかどうかを調べるため、対応のある相関係数の同等性の検定をおこなった。その結果、マキャベリアニズム、身体的攻撃、言語的攻撃についてはPPの方がSPよりも有意に相関が高く (マキャベリアニズム: $t(214) = 5.86, p < .01$, 身体的攻撃: $t(214) = 3.35, p < .01$, 言語的攻撃: $t(214) = 3.48, p < .01$)、短気はSPの方がPPよりも有意に相関が高く ($t(214) = 2.79, p < .01$)、敵意はSPがPPよりも高い傾向がみられた ($t(214) = 1.95, p < .10$)。

3.2 共感性

PPとSPの共感性の違いがみられるかどうか検討するため、因子分析によって得られた各因子の得点が平均+1SD以上を高群、平均-1SD以下を低群に分け、各共感得点の平均の差を検討した。まずPPとSPを統制するため、PP高群 (PP: $M = 43.45, SD = 4.43$, SP: $M = 13.23, SD = 2.45$) とPP低群 (PP: $M = 23.08, SD = 2.00$, SP: $M = 12.92, SD = 1.35$) について各得点についてt検定をおこなった。その結果、PPについては有意な差がみられたが ($t(28.17) = 19.94, p < .01$)、SPについては有意な差がみられなかった ($t(31.51) = 0.52, p = .61$)。同様にSP高群 (SP: $M = 17.97, SD = 1.09$, PP: $M = 33.23, SD = 4.01$) とSP低群 (SP: $M = 9.38, SD = 0.72$, PP: $M = 31.13, SD = 4.43$) についてもt検定をおこない、SPでは有意な差がみられたが ($t(46) = 28.47, p < .01$)、PPでは有意な差はみられなかった ($t(44) = 1.64, p < .11$)。

次にPP高群とPP低群、SP高群とSP低群の個人的苦痛得点と気持ちの想像得点に差がみられるかt検定をそれぞれおこなった。t検定の結果、PP高群の方がPP低群に比べて個人的苦痛得点 (PP高群: $M = 13.76, SD = 4.92$, PP低群: $M = 17.12, SD = 4.78$) および気持ちの想像得点 (PP高群: $M = 17.0, SD = 3.15$, PP低群: $M = 18.88, SD = 3.09$) が有意に低かった (個人的苦痛: $t(45) = -2.36, p < .05$, 気持ちの想像: $t(46) = -2.09, p < .05$; Figure 1)。一方、SP高群はSP低群に比べて、個人的苦痛得点 (SP高群: $M = 18.74, SD = 5.02$, SP低群: $M = 13.19, SD = 4.28$) は有意に高かったが ($t(45) = 3.77, p < .01$)、気持ちの想像得点 (SP

Table 1: Result of factor analysis to the PSPS (principle factor method ; promax rotation)

項目内容	因子	
	I	II
Primary ($\alpha = .824$)		
13 他人から搾取されるような間抜けな人は、たいていそうされてちょうどよい。	.639	-.060
25 成功は、適者生存の原理に基づいている。負けた人間のことなど気にならない。	.599	-.015
19 他の人達には高尚な価値とやらについて悩ませておけば良い。私の主要な関心は損か得かである。	.557	.187
20 私の人生の主要な目的は、欲しいものをできる限り得ることだ。	.553	.199
26 人は愛というものを過大評価していると思う。	.550	-.074
2 他の人の気持ちを操ることは楽しい。	.543	.027
11 自分のためということは、私の最優先事項である。	.541	-.089
12 今の世の中、とがめを受けずにすめば、成功するためにどんなことをやっても正当化できる。	.522	.060
10 もし自分の成功が他の誰かの犠牲の上に成り立っているものだったら、私は困り果ててしまうだろう。*	.496	-.131
14 たとえ一生懸命に何かを売ろうとするときでも、ウソをつかない。*	.422	-.095
23 私の最も重要な目標はたくさんお金をもうけることだ。	.396	.070
17 自分の目的を追求するときに、他の人を傷つけないように努めている。*	.388	-.094
6 他の人に対して不公平なので、不正行為で利益を得ることは正当化できない。*	.384	-.056
1 どんなことをやっても、とがめを受けずにすめば、私にとっては正しいことだ。	.378	.029
9 私は、他の人が開きたがっているようなことを言ってやる。そうすれば、その人たちは私が望むことをしてくれるようになる。	.321	.121
Secondary ($\alpha = .643$)		
18 自分が始めた作業でもすぐ関心を失ってしまう。	-.122	.693
22 気が付くと、再三再四、同じようなトラブルになってしまう。	-.058	.648
24 非常に前から計画をしておくということはない。	-.112	.422
3 しばしば退屈する。	.053	.415
15 長い間ひとつの目標を追求できる。*	-.058	.410
7 私の問題の大部分は、単に他の人々が私を理解していないことによる。	.170	.337
	回転後の負荷量平方和	4.06 2.49
	因子寄与率	20.02 5.45
	因子間相関	
	I	II
* 逆転項目	I	.485
	II	

高群 : $M = 17.38$, $SD = 2.83$, SP 低群 : $M = 20.50$, $SD = 2.19$)
 は有意に低かった ($t(46) = -3.87, p < .01$; Figure 2)。

4. 考察

本研究の目的は日本語版 PSPS の基準関連妥当性の確認および PP と SP における多次元的な共感性に違いがみられるかを検討することであった。

まず、日本語版 PSPS の基準関連妥当性であるが、PP とマキャベリアニズムの間に SP よりも有意に高い相

関がみられた。このことは先行研究とも一致しており (McHoskey et al., 1998)、PP の基準関連妥当性を示す結果であると考えられる。一方、SP は PP よりも BAQ の下位尺度である短気と有意に高い相関がみられ、SP と敵意の間の相関は PP よりも高い傾向がみられた。SP は衝動性と関連するため、PP よりも短気や敵意といった項目と相関が得られることは概念的に合致している。しかしながら、身体的攻撃と言語的攻撃との相関は SP よりも PP の方が高い相関を得られた。衝動性を特徴とする SP の方

Table 2: Correlation between PSPS subscales and each scales

	PP	SP
マキャベリアニズム	.64 **	.29 **
短気	.24 **	.43 **
敵意	.29 **	.42 **
身体的攻撃	.53 **	.31 **
言語的攻撃	.28 **	.02

注 : * $p < 0.5$, ** $p < 0.1$

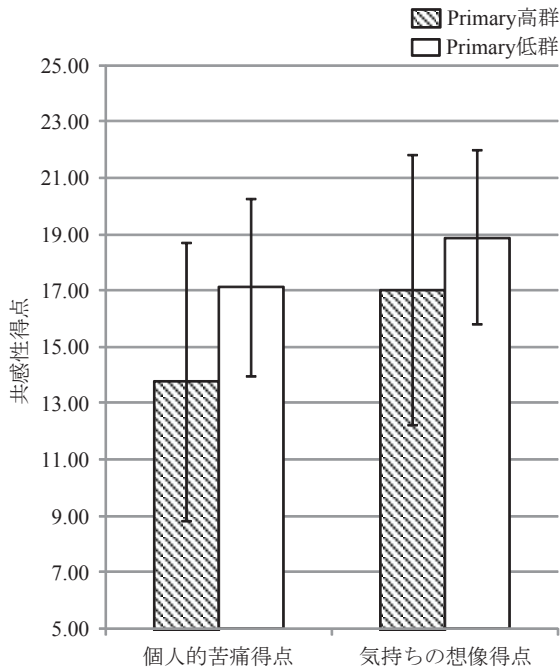


Figure 1: Difference of empathy between High PP and Low PP

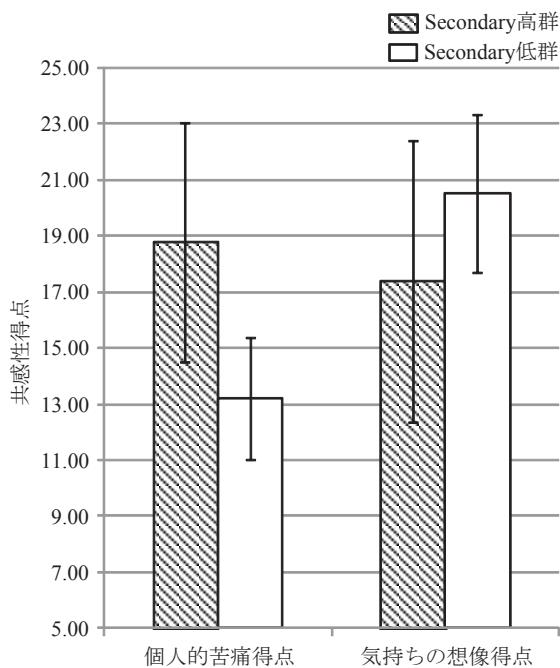


Figure 2: Difference of empathy between High SP and Low SP

がPPよりも身体的攻撃との相関が高くなると予測されたが、このことは身体的攻撃についての質問項目の中に道具的攻撃を示す内容が含まれていたからではないかと考えられる。サイコパスは、危険にさらされることによって誘発される反動的攻撃だけでなく、金銭や物品の獲得などの目的のために用いられる道具的攻撃と関連があることが示されている (Cornell, Warren, Hawk, Stafford, Oram & Pine, 1997; Blair, 2001)。身体的攻撃の質問項目の中には、「どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない (逆転項目)」、「権利を守るためには暴力もやむを得ないと思う」などの道具的な攻撃を示すような内容があり、サイコパスの本質を捉えているPPの方がSPよりも高い相関が得られたのではないかと考えられる。また言語的攻撃についてもPPの方がSPよりも高い相関が得られたが、言語的攻撃の項目には「友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う」や「自分の権利は遠慮しないで主張する」などがあり、サイコパスは他者に対して操作的に振る舞うため、このような項目が他者操作的な要因としてPPとの相関がみられたのではないかと解釈される。以上のように日本語版PSPSの基準関連妥当性について、ある程度の妥当性が確認されたと考えられるが、まだ検討の余地が大きいと思われる。

次にPPとSPの多次元的な共感性の違いについて述べる。PPは個人的苦痛、気持ちの想像得点が共に減少していた。これはサイコパスの特徴である共感性の欠如と一致する結果となった。Blair (1995; 2006) の主張するVIMモデルによれば、サイコパスは他者の苦痛に共感できないために攻撃行動が抑制されないと主張している。しかしながら、SPは個人的苦痛得点が高いことが示されており、このことは、他者の苦痛に敏感過ぎても攻撃行動に結びつくことを示唆すると考えられる。個人的苦痛は年齢の上昇とともに減少する傾向がみられており (登張, 2003)、先行研究からも個人的苦痛が攻撃行動と関連することが示されている (鈴木・木野, 2008) ことから、発達に見合った個人的苦痛の減少がみられないことが犯罪者における共感性の高さの要因ではないかと考えられる。一方、気持ちの想像得点はPP、SP共に低く、さらにPPとSPはBAQの各下位因子と正の相関を示すことから、気持ちの想像のような他者の立場を考えるような認知的な共感性が攻撃行動の抑制とより深くかかわっているのではないかと考えられる。先行研究からも、暴力的な犯罪者は非暴力的な犯罪者よりも認知的共感性が低いこと (岡本・河野, 2010) や認知的共感性が高くなると行為障害傾向が減少すること (淵上, 2008)、認知的な共感性を高める操作を行なうと言語的攻撃行動が減少する (常岡・高野, 2012) など、認知的共感性が攻撃行動の抑制に関与することが示されている。

本研究の結果から、日本語版PSPSの基準関連妥当性とPP、SPにおける共感性の違いが示唆された。しかしながら、多くの点で問題の残る結果となった。まず基準関連妥当性についてであるが、BAQとの関連について予測とは異なる結果となった。上述のように、身体的攻撃や言

語的攻撃とPPとの相関は矛盾する結果ではないと考えられるが、SPの基準関連妥当性を明確に示すことはできなかった。さらにPPと関連する概念はマキャベリアニズムのみではなく、自己愛傾向なども挙げられている (Paulhus & Williams, 2002; 大隅・大平, 2010)。このことから、今後はPPおよびSPの概念により適した尺度を選定した研究が必要である。

また、共感性についても除外した下位尺度があり、特に他者の苦痛に対して同情や憐れみを感じる共感的関心 (Davis, 1994) について調べることができなかった。共感的関心を調べることで、Blair (1995; 2006) が主張するVIMモデルに基づいた検討が可能であったはずである。さらに今回は質問紙調査であり、他者の気持ちを想像する、あるいは感じるなどの操作を施した実験的場面ではなく、社会的望ましきなどの要因が強く反映されることも考えられる。しかし、PPとSPにおける多次元的な共感性の違いが確認されたことは、PSPSの弁別的な妥当性を支持する結果であり、PSPSの尺度としての有効性を示していると考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). *The Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (4th ed.). Washington, DC, American Psychiatric Association.
- 安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 (1999). 日本語 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討. *心理學研究*, 70(5), 384-392.
- Blair, R. J. R. (1995) A cognitive developmental approach to morality: Investigating the psychopath. *Cognition*, 57(1), 1-29
- Blair, R. J. R. (2001). Neurocognitive models of aggression, the antisocial personality disorders, and psychopathy. *Journal of Neurology, Neurosurgery & Psychiatry*, 71, 727-731.
- Blair, R. J. R. (2006). The emergence of psychopathy: Implications for the neuropsychological approach to developmental disorders. *Cognition*, 101(2), 414-442.
- Blair, R. J. R., Jones, L., Clark, F. & Smith, M. (1997). The psychopathic individual: A lack of responsiveness to distress cues? *Psychophysiology*, 34, 192-198.
- Buss, A. H. & Perry, M. (1992). The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63(3), 452-459.
- Christie, R. & Geis, F.. (1970). *Study in Machiavellianism*. New York: Academic Press.
- Cleckley, H. (1976). *The Mask of Sanity* (5th ed.). St. Louis, MO: Mosby.
- Cornell, D. G., Warren, J., Hawk, G., Stafford, E., Oram, G. & Pine, D. (1996). Psychopathy in instrumental and reactive violent offenders. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64(4), 783-790.
- Davis, M. H. (1994) *Empathy: A social Psychological Approach*. Madison, WI: Brown & Benchmark. (菊池章夫訳 (1999). 共感の社会心理学—人間関係の基礎—. 川島書店).
- 出口保行・大川力 (2004). エンパシフィッククライムに関する研究 (I). *犯罪心理学研究*, 42 (特別号), 140-141.
- 淵上康幸 (2008). 共感性と素行障害との関連. *犯罪心理学研究*, 46(2), 15-23.
- Hare, R. D. (1991). *The Hare Psychopathy Checklist-Revised*. Toronto: Multi-Health Systems.
- Harpur, T. J., Hakstian, A. R. & Hare, R. D. (1988). The factor structure of the Psychopathy checklist. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 56(5), 741-747.
- Hart, S. D. & Hare, R. D. (1989). Discriminant validity of the psychopathy checklist in a forensic psychiatric population. *Psychological Assessment*, 1(3), 211-218.
- Hart, S. D. & Hare, R. D. (1996). Psychopathy and antisocial personality disorder. *Current Opinion in Psychiatry*, 9(2), 129-132.
- Karpman, B. (1941). On the need of separating psychopathy into two distinct clinical types: The symptomatic and the idopathic. *Journal of Criminal Psychopathology*, 3, 112-137.
- Levenson, M. R., Kiehl, K. A. & Fitzpatrick, C. M. (1995). Assessing psychopathic attributes in noninstitutionalized population. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68(1), 151-158.
- McHoskey, J. W., Worzel, W. & Szyarto, C. (1998). Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(1), 192-210.
- 大隅尚広・金山範明・杉浦義典・大平英樹 (2007). 日本語版一次二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, 16(1), 117-120.
- 大隅尚広・大平英樹 (2010). 心の闇の側面—サイコパシーにおける感情の機能低下—. *感情心理学研究*, 18(1), 2-14.
- 岡本英生・河野荘子 (2010). 暴力的犯罪者の共感性に関する研究—認知的要素と情動的要素による検討—. *心理臨床学研究*, 27(6), 733-737.
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The dark triad of personality: Narcissism, Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Research in Personality*. 36(6), 556-563.
- 齊藤勇 (1983). 人間関係の心理学. 誠信書房.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元的共感測定尺度を用いて—. *奈良教育大学紀要*, 37(1), 149-153.
- 杉浦義典・佐藤徳 (2005). 日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性. *日本心理学会第 69 回大会発表論文集*, 407.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元的共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—. *教育心理学研究*, 56(4), 487-497.
- 登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達—多次元的視点による検討—. *発達心理学研究*, 14(2), 136-148.
- 常岡充子・高野陽太郎 (2012). 他視点取得の活性化による言語的攻撃の抑制. *社会心理学研究*, 27(2), 93-100.

(受稿：2012年12月8日 受理：2013年1月22日)